



1957年7月24日
三島・パサディナ 姉妹都市縁組宣言式
右端が小松隆



市中パレードで市民の歓迎を受ける
ウィルソン特使夫妻

Is Rotary's Concept of a World at Peace, Utopian?

米国ミネソタ州・セントポール市のルイス・W・ヒル・ジュニア氏は、祖父が経営する汽船会社の長崎航路に乗って、何回か長崎を訪れていた。彼は、数回の訪問で魅了された長崎の自然や人々が、原爆によって変わり果てた姿に心を痛めた。しかし「市民同士の友情が深まれば、争いのない、平和な世界を築くことができるだろう」という信念の下、両市の姉妹都市提携の働きかけを行った。こうして1955年12月、日米初の姉妹都市提携が結ばれた。

1957年7月、静岡県三島市は米国カリフォルニア州パサディナ市と都市提携を結んだ。きっかけはパサディナ市の「富士山に見える美しい都市と縁組を結びたい」という希望であったが、三島出身の鈴木定吉氏（元東京ニューヨーク協会常務理事）やパサディナに在住した森田二郎氏など、関係者の働きが提携への動きを後押しした。宣言式には当時日米協会会長の小松隆氏（三島出身）も参列している。

「世界の枢要中心地に数千のロータリー・クラブを有せんとするこの大機関を以ってしても、なお且つ「戦争」と呼ぶ一制度に対しては重要な影響を与え得ぬであろうか。これは正に厳粛なる問題である。もし戦争が理性的のものであるならば、人は右の借問に対して直ちに肯定を以て答え得るであろう。しかれどもおよそ戦争なるものは理性を知らない。戦争は勝敗の何れの場合にも相償わぬものである。最善なる戦争も人類の知る最悪の事件である。人間の感情を抑制せざる結果が戦争である。」（『ロータリーの理想と友愛』ポール・ハリス著・米山梅吉訳）

アメリカのアイゼンハワー大統領は、1956年に「市民と市民（ピープル・トゥー・ピープル）プログラム」（people-to-people program）を提唱した。市民同士の国際交流の提唱は、相互理解によって世界平和に寄与することを目標とされていた。

言語、文化、習慣など異なる他者に触れる機会が多くなるにつれ、理解や寛容が広がる一方で、少しの誤解や偏見から摩擦も生まれやすくなっている。人やモノの交流が生み出す信頼と敬意が尊重される世の中であることを願うばかりである。

ご挨拶



公益財団法人 米山梅吉記念館
理事長 松村 友吉

昨年9月の理事会におきまして、積惟貞前理事長の後任として理事長を拝命致しました、焼津ロータリークラブの松村友吉と申します。

米山梅吉翁についての理解も記念館についての知識も乏しい私に、果たして理事長職が務まるか否か、甚だ心許ない限りですが、理事会の皆様のご推薦を受けた以上、私の力の及ぶ限りの努力を傾け、記念館運営にあたっていきたいと思っております。これまで、この記念館を支えてこられた皆様のご指導やご支援をいただきながら、何とか職務を全うしたいと思っております。よろしくお申し上げます。

4年前、地元2620地区のガバナーを務めた折、米山梅吉翁の生涯について学ばせていただきました。米山梅吉翁は、ロータリーの創始者ポール・ハリスと同年齢で、亡くなったのも1年違い。お二人の共通項がほかにも見つかりました。若き日の熱い青雲の志や他者に対する温かい寛容な姿勢は、現代の私達ロータリアンに対する生きた教えだと思いました。近年ロータリーの理念が少しずつ希薄化しつつある中、このお二人の生き様や言動は、そのままストレートに私達にロータリーの理念を教えてくれているような気がします。

米山梅吉翁がその創設に深くかかわった日本のロータリーは歴史を重ね、2020年に100周年を迎えました。その折「日本のロータリー 100周年実行委員会 ビジョン策定委員会」から提言が出されました。そこに述べられているように、ロータリーの根本理念を突き詰めていくと、定款4条「ロータリーの目的」にある「奉仕の理念」がまさにそれに当たる、ということになります。それでは、その「奉仕の理念」

の中身をより明確に説明しようとするとなかなか難しいものがあります。そこでこの「奉仕の理念」を自らの人生で体現してこられた米山梅吉翁の生き方を知ることが、最も早くまた的確な理解に繋がるのではないかと考えています。

そのような意味で、改めて日本のロータリーの創始者たる米山梅吉翁をこれからも顕彰し、語り伝えていくことが極めて重要なことであると思っております。それは、ロータリーの世界だけに限りません。未だに自分や自国の欲求のみに没頭して、他者への意識が欠落して起きる出来事が世界中で多く見られます。他者への思いやり・寛容の心が少しでも社会に広がり、誰もが安心して生きていける平和な世界を築いていくためにも、米山梅吉翁の遺徳を世に広くお伝えしていくことが今必要なことだと思っております。

ロータリー米山記念奨学会については、広く全国にその存在が知られ、多くの支援がロータリアンから寄せられていますが、記念館については1度も訪れたことがないロータリアンが多くおられ、全国に限らず知れ渡っているとはいえない難しい状況です。公益財団法人米山梅吉記念館としては、これから更にその存在を全国に認知していただきながら、ロータリーの生きた理念として米山梅吉翁の遺徳を広めていきたいと思っております。

これからの米山梅吉記念館にご期待いただきながら、更なる温かいご支援・ご指導をいただきますよう、重ねてお願い申し上げます。

第15回 全国高校生歴史フォーラム参加記

三島学園知徳高等学校2年生の生徒グループが、第15回全国高校生歴史フォーラム(奈良大学・奈良県主催)に参加しました。今回は本文の一部を抜粋し、参加記として掲載いたします。

研究テーマ:米山梅吉から学ぶ「奉仕」

～「新隠居論」、「常識関門」、「米山梅吉傳」の研究～

須藤恭平 坂倉茅瀬 杉村和奏 横井千夏



我々は、歴史に興味があるクラスメイト同士で集まり、社会科の先生に勧められて「全国高校生歴史フォーラム」に挑戦することになりました。研究テーマを郷土の偉人に絞った結果、近くに米山梅吉記念館があったことから「米山梅吉」について研究することに決めました。ヒントを得るために記念館を訪れた結果、梅吉の生涯の根底に彼自身の奉仕思想があることに気づきました。梅吉の論文である「新隠居論」と『常識関門』の分析を通して彼の思想に迫ると、梅吉の生涯にとって核となる思想を発見するに至りました。それは、梅吉が奉仕活動を決して特別なことではなく、「常識」と定義づけたことでした。また、老後には社会の第一線から退くことを勧め、公益事業を通して社会奉仕することが日本人の目指すべき「隠居」であると梅吉は説きました。「まずは自分に奉仕をすることが優先である」という考え方は、一般的なボランティア精神には含まれておらず衝撃を受けました。そして、それら梅吉の全ての思想は、彼自身の経歴や彼が創

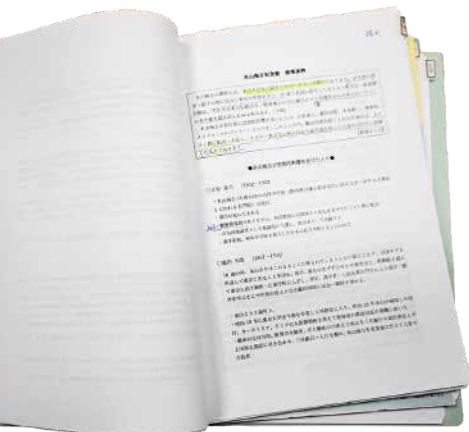
設した「東京ロータリークラブ」などに反映されていました。つまり、梅吉は彼自身の生涯で「奉仕思想」を実践していたことを意味します。

今回我々が行った研究では、そんな梅吉の思想を重点的に分析する為に以下の構成としました。第1章では梅吉の生い立ちを概説し、第2章で壮年期の代表作「新隠居論」から、第3章で晩年の代表作『常識関門』から、第4章で梅吉の三男・桂三の回顧録から思想の形態とその原点に迫りました。これらの研究を通して郷土の偉人を再評価し、現代社会の発展の一助にする狙いがあります。(下記、第2・3・4・終章から一部抜粋。資料省略)

「新隠居論」から見る米山梅吉の思想

本章では、「新隠居論」から見る梅吉の思想について明らかにしていく。大正3年、梅吉(46歳)が発表した「新隠居論」には、将来の奉仕思想の萌芽がみられ、日本で主流となっていた「楽隠居」とは大きく変わるような「新しい隠居」を提示している。まず、梅吉は「余は独り実業界と謂はず、社会各方面の老人株に向かつて、隠居することを勧めたいのである。」と真っ先に主張している。大正時代は、明治期に比べて教育水準が高くなった。そこで、未来ある青年を発掘し応援する為に奨学金などを惜しまず寄付している。梅吉は、このような優秀な若者たちが業界の中核で活躍する為に、老人株が引退次の世代に移すことが日本社会には大切であると訴えたのである。そこで梅吉は「新隠居論」の中で、人が世に出て





所を得る機会を三通り挙げている。一つ目が千載一遇の機会と題して、明治維新をその機会と位置付け、今日の人々が望むべきではないと述べて

いる。これを踏まえると、二つ目の人一代に必ず来る機会と、三つ目の日常身辺に群がってくる千種万様の小機会しか当時の学生には残っていないと推測できる。このような状況からも、老人は公益事業に専念する隠居をすることで、これからの未来を担う若者にチャンスをより多く与えられるという考えを立証できる。

では、上記で示した「隠居」はどのような意味を表しているのだろうか。当時の日本における隠居は、「楽隠居」と称して完全に趣味の世界に入り世の中と没交渉になることを目指した。梅吉はそんな「楽隠居」ではなく、西洋の「隠居」を提唱している。西洋では「隠居」としての仕事を引き受ける隠居人を紳士の理想像としている。「人間は自分の稼業以外職掌以外に何か社会公衆の為に奉仕する所が無くては、まだ人間としての義務を十分に果たしたとは言えない、西洋人の隠居後に為す仕事は此意味から社会の為に尽すと云うの



『實業之日本』(大正3年8月15日号)

である、之を人間報恩の為めと云う亦可なりである。」と記したことを踏まえると、今まで活躍した能力を生かして社会に貢献する隠居形態を勧めていたといえる。

では、「新隠居論」の中で唱えられている、隠居した人が社会の為に働くとはどのようなものなのか。梅吉は、日本の公益事業(非営利目的)を実業界で名を

挙げた老人らに監督してもらい、不適当な人々によって行われていた公益事業を改善して欲しいと主張している。当時、慈善博愛を標榜する日本最大の某団体でさえも「悪徳新聞に恐嚇され、金を絞られた」と主張することから、他団体の実態はよりひどい状況だったことが推測できる。また、当時の公益事業は、自身の利益を第一とする人が牽引していた。すると、どうしても公益事業が悪徳なものになってしまい、本来の目的を忘れてしまう。その為、当時の日本の公益事業は悉くうまくいかなかった。これらを踏まえて、公益事業を有効で実体のあるものにするためにも実業界の元老たちに名誉と信用、そして貴重な経験を以って、改善に取り組んでもらい、団体の理念が実現できるようになることを梅吉は「新隠居論」で期待していただろう。実際、梅吉も実業界を引退した後、自身の実業界での成功を踏まえて公益事業に熱心に取り組み、大きな影響を実業界に与えた。

続いて梅吉は「功名を遂げて裕福で且つ経験を持つた老人は日本の権威であり国宝でなくてはならない。そうしてその人達の老後の務めが前々から述べてきたようになって欲しいと切望するのである。」と述べている。これは、日本をここまで近代化してきた老人たちは立派で尊重されるべき存在としながらも、逆に実業界の未来は若者たちに任せようとしていると捉えることもできる。隠居は「趣味の世界に入る」のではなく「公益事業に専念する」ためのものである。梅吉は、生涯を公益事業に尽すことを通して、新隠居を実践した。このような、経済界への多大なる成果をもたらした梅吉であったが、生涯その成果を誇張しなかったことから、それが「常識」であることを位置づけたと推測する。その「常識」を、次章で分析する。



『常識関門』の分析

本章では、50歳の頃に青山学院で梅吉が行った「常識講座」を基に、これから社会に出る学生に対して、梅吉が将来期待することを端的にまとめた『常識関門』（昭和11年・68歳）を分析する。冒頭では、「常識というのは、経験が基礎を成しているため、いつまでも同じ常識を意識して消極的に物事を進めていくのは誤りであり、経験と知識を応用してその時々合った自他の律し方を作っていくべき。」と定義づけている。このような作法を常識と位置付け、これを持つ人は生活が健全となり、それが増えれば国家社会が平和になると記している。

梅吉はそのような出世と「奉仕」の両方を持つことが常識であると主張した。まず、財産は個人が占有せず、他人の利益のために使われるべきであり、自己中心的な思想に囚われていると、結果的に幸運を招かずに失敗すると考えたのだ。次に、異文化にも奉仕の精神が存在し、その文化を持った国々が今も世界の中樞を担っていると主張した。具体例としての一つ目に、米国においての、ニュージャージー州のウィルソン知事の考え方とロングフェローの考え方を挙げている。前者の考え方は、人は自尊心を持って自分を知り、身についた自制の心で自身を律するべきというものだ。後者の考え方は、事業を行うときには、自身が率先してそれに当たらなければならないというものだ。二つ目に、英国においての、言行一致が重要な英国発祥の紳士道という考え方を挙げている。実際に行動し、その成功を用いて国家社会に奉仕することが真の常識であり価値ある判断であるというものである。三つ目に、アジアにおいての、幼少期に学んだ古典文学の考え方を挙げている。身近な常識的活動が重要な真の禅や、生涯裕福に暮らすべきではなく福祉活動をして後世に社会道徳を教えるべきと謳われた和歌、人と関わり思いやる同情心が必要と説いた論語などである。このような記述から、梅吉自身が学校で学んだ漢学や海外視察で気付いた西洋の近代的文化が奉仕に直結していると主張していることが文章から分析できる。

また、ロータリーについても言及し、公平かつ正義である世界的精神運動のロータリークラブは、実業界の専門家がリーダーとして日常の個人職務をこなすと同時に、専門家として他人の為に尽す団体であると

記している。自他のどちらにも尽力する調和も必要だが、まずは自分を奉仕することが優先であることを定義付けている。これは、マザー・テレサのような、自分を犠牲にして奉仕をするという考え方と差別化していると推測できる。そうすることによって、他人にできる奉仕も拡大できると梅吉は考えたからだ。この考え方を実践したものがロータリークラブである。そして最後に、人間として社会のために尽すべきことは多く残っており、命には限りがあるため迂闊に過ごしてはいけないと、その後の奉仕に拍車をかけるような持論を記して終わりにしている。



子供から見た米山梅吉 ～「米山梅吉傳」より～

本章では、米山家の三男・桂三が書き記した「米山梅吉傳」を基に、梅吉の人格形成に家族がどのように関わっていったかを紐解いていく。梅吉には長女・愛子、次女・澄子、長男・東一郎、次男・駿二、三男・桂三の5人の子供がいた。梅吉の子供に対する愛情は強かったようで梅吉は当時の実業家としては珍しく、いつも子供を集めては食事を共にすることを最上の喜びとしていたことから、子供たちを非常に可愛がっていた人物と言える。

長男の東一郎が風邪をおして大学の体育会陸上部の走り高跳びの選手として参加したことで肺炎を誘発し、20歳という若さで夭折してしまったときの悲しみは誠に大きく、辛い出来事であった。しかし、梅吉が生涯において受けた試練はそれだけにほとどまらなかった。続いて、次男の駿二が21歳という若さで夭折してしまった。そのような不幸が立て続けに起きる中で梅吉は社会奉仕に対してより深く考えるようになった。そして、長男と次男の死を通して、奉仕の精神の中でも特に子供の支援に力を入れるようになった。具体

的には、東一郎が夭折してしまったとき、梅吉は従来スポーツには全く関心がなかったにも関わらず、東一郎の死を追悼して慶應義塾体育会に「米山東一郎五哩マラソン賞」を寄付した。さらに、青山学院緑岡幼稚園と緑岡小学校を創立し、多額の寄付を行った。その理由として、奉仕の精神を幼いころから教え、少しでも日本社会をより良い明るい民主社会にしようとしたからである。梅吉は恩を相手に売りつけてそれを利用するというような姿勢はなく、たくさんの援助をしていたが見返りを求めるようなことは一切なかった。高給取りでお金を持っていたが、贅沢を好まず、他人に対する援助に使っていた。他に自分の子供に対する献身も惜しみなく、三男の桂三が、大腸カタルを起こしてしまったときに毎晩不眠の看病を行った。また、初めての著書を出版しようとしたときの出版社探しに原稿の添削等手厚い支援を行った。梅吉にとっては奉仕を義務として捉えていたと桂三は回顧している。奉仕の対象は自分の子供だけでなく、他人の子供にもひたすら互いに幸福であることのみを願ったのであった。このように、梅吉は多くの青年に対して無償の援助を個人で行っていた。これは、息子二人の夭折という辛い出来事が深く関係しているのではないだろうか。

おわりに

梅吉が奉仕家となるには幾つかの要因がある。生涯教養に恵まれたこと、留学・調査員として欧米文化を研究したこと、二人の息子を早くに亡くしたことなどである。しかし、自身が決してそれを誇張しなかったのは、内面にあるしっかりとした奉仕思想を「常識」と位置づけたからだと結論づける。サラリーマンは経験を重ねて社会の中核を担い、老後はその経験を生かして自他の両方に奉仕する。生涯を通して社会的責務を果たすことで日本は豊かになるというのが梅吉の思想であった。だからこそ、東京ロータリークラブはその思想の実践例であり、約20年もの間その道の第一人者として活動し続けることで、奉仕の精神を世に広めようとしていたのではないだろうか。

梅吉は、自身の生涯を奉仕精神の手本として示した。日本のロータリーは戦後に復活を遂げ、奉仕を通じて国際平和を目指している。また現在、故郷・長泉町の小学校では「米山梅吉デー」を設けて清掃活動等の奉仕活動を行っている。

当初梅吉がロータリークラブ設立の先に夢見ていた社会は現在に相当するだろうか。新型コロナウイルスと世界全体が奮闘している中、ワクチンの確保競争や人為的責任の追求など各々の利益だけしか考えていない。世界の何処かで飢餓が起きていても自国の発展を優先してしまう。そんな時こそ、各分野の「老人株」は自分の役割を自覚して行動し、経験を後世に生かしていく「奉仕」が求められる。また、我々のような若い世代は「千種万様の小機会」を逃さず、活躍できるように研鑽を積むことが大切なのではないだろうか。これこそが、梅吉の夢見た奉仕社会に相当すると考える。戦前に生まれた梅吉の思想を、二十一世紀の今こそ、再び学び直す必要があると本研究をもって結論付ける。

研究発表を終えて

この研究を通して、世間でよく使われる「奉仕」という言葉の本当の意味を知ることができました。我々は、まだ若く今後多くの経験と知識を積み、日本の中枢を担えるように研鑽し続けなければなりません。そして老後には、その経験を後世に残すために公益事業に参画する必要があります。そのためには、梅吉が大事にしてきた奉仕の精神を継承していくことが現代を生きる我々には必要不可欠となってくると思います。

研究を終えた今では、郷土にこのような偉大な偉人がいることを誇りに思います。今回、入賞することはできませんでしたが、梅吉という存在を深く知ることができ、昔と現代、梅吉と自分といったそれぞれ違った視点、違った観点で見ることで多様性を見つけることができました。そして、自らの人生設計を深く考えるきっかけになりました。



小松 隆

—三島とRCと国際相互理解—



早稲田大学 アジア太平洋研究センター
特別センター員 飯森 明子

はじめに

日本のロータリーの歴史書や『東京ロータリークラブ50年のあゆみ』（東京ロータリークラブ、1970年）を紐解くと、占領期1946～48年に日本のRI復帰に尽力した人物として、「ロータリークラブ復帰協議会」会長小松隆（1886～1965年）の名が挙げられます。小松は、1955～6年第60地区ガバナーをつとめ、1958年ダラスRI会議にはRI委員会委員として参加しました。しかし、太平洋戦争終戦からひと月もしないうちに、日本のロータリークラブ（以下RC）の国際ロータリー（以下RI）へ復帰に向けて、小松が「胎動」を始めていました。

筆者はこれまで日米協会や太平洋問題調査会（IPR）など、戦前から戦後にかけて日米交流で活躍した人物として小松に注目してきました。穏やかな性格で東洋汽船や日本鋼管の企業人でもあった小松は、企業から引退後も丸ビルに自分のオフィスを持っていて、1950年代頃の話として、部屋につながる5つのドアの何処から人が入ってきたかでの団体の用事かがわかったといいます。一つは日米協会、一つはKEEP（理事長、清里での農産物改良を手掛ける教育財団）、一つは東京RC、一つはグルー財団、一つはバンクロフト財団。どれも活発に国際交流を展開し、現在まで至る団体です。

小松は米山梅吉とは戦前からRCのほかにも、様々な日米交流団体で親しい接点がありました。米山は明治以来米国との親善交流をおこなっていた日本人の団体、米友協会の会員で常任監事でした。1917年米友協会は、在留米国人の団体（アメリカン・アソシエーション）とともに日米協会となります。米山は日米協会では終身会員としてその活動にも参加し、監査もつとめました。小松も日米協会の会員で1928年から幹部として活動し、1950年から会長を務めました

が、60年日米修好百年を機に吉田茂元首相に会長を譲ります。また米山も小松も米国駐日大使バンクロフトの遺志を継いで1928年設立されたバンクロフト基金で学生らの日米交流を支援しました。

小松はこのほかにも、多くの国際交流活動団体や国際会議に参加しています。とりわけ1921年ワシントン海軍軍縮会議全権加藤友三郎海相の、1927年ジュネーブ軍縮会議全権斎藤實元海相の通訳を小松が務めました。毎日その日の会議が終わった後、小松は英語の細かなニュアンスを含めて丁寧に説明をしたといい、加藤や斎藤から厚い信頼を得ました。

さて1933年4月29日、第70区第5回地区年次大会が開かれました。この時、海外からも8名がドイツ・ハンブルクや、南アフリカ・ヨハネスブルクから参加し、東京や近郊で盛大に歓迎行事が開かれます。東久邇宮殿下や、首相で東京RC名誉会長の斎藤實、浅野良三会長（1932～33年）とともに国内各RC代表らも出席し、帝国ホテルで歓迎晩餐会が開かれました。翌日翌々日には、ロータリアン家族も多数参加して、神宮絵画館見学や能の鑑賞、朝霞でのゴルフ大会が開かれました。金屏風の前で小松の紋付羽織袴の正装姿が明瞭かつ流ちょうな英語でこの大会を紹介しているフィルムが残っています。



羽織袴姿の小松隆

（この貴重なフィルムや種々資料について、水沢RC佐藤剛氏からご教示いただきました。心より御礼申し上げます。）

1933年春といえば、満州事変の戦火がタンクー停戦協定でろうじて留まる直前であり、すでに3月史上初の恒久平和を目指した国際連盟から日本は脱退を通告しました。まさに日本が国際社会との協調姿勢から離れようとする時期でした。一方1933年から35年にかけて、日本は様々な機会をとらえて国際交流活動を非常に活発に進めていました。

小松はこのような複雑な時代を含む戦前戦後の日本において、信頼作りの国際交流を支えた一人であったと筆者は考えています。これまでの筆者の研究調査や小松家からお預かりしている個人資料やインタビューなどから、小松と三島やRCとの関わりを中心に紹介しましょう。

小松と故郷三島

小松は1886年3月26日、父小松酒造三郎、母つねの次男として静岡県三島に生まれました。いうまでもなく米山梅吉が幼少年期を過ごしたRCにもゆかりの深い三島です。

小松の生家は三島大社のすぐ近く、三島の街を流れる富士山からの清流が得られる場所にありました。



花島兵右衛門

幕末文久生まれの父親は、おそらくはその名前から酒造関連の仕事を継いでいたのでしょう。いくばくかの財産とわずかな土地を持っていたようですが商才に恵まれず、父親は事業に失敗し1892年引退しました。子供たちに十分な教育も与えられないと、次男で幼い隆は、伯父

花島兵右衛門(1846-1929年)に預けられ、その後、1895年9才で横浜の鉄材貿易実業家で跡継ぎのいない田中茂の養子となりました。(1897年復縁)

ところで、小松について語るとき、彼の米国との出会いを語らなければならないでしょう。母の実家、花島家は明治初め酒造業を営んでいました。母の兄、隆の伯父花島兵右衛門は、三島地域のキリスト教布

教や酪農業で活躍した人物として有名です。1882年三島大社近くで布教活動をしていた宣教師が宿場の人たちと騒動となり乱暴を受けた際、花島は宣教師らを助けた一人で、それがきっかけとなって1885年から酪農を始めます。まもなく1886年家族そろってキリスト教に改宗し、彼は酒造業を廃業して酒蔵を教会礼拝に用い、やがて練乳の製造を始めます。もともと教育支援に理解があった花島はキリスト教主義の薔薇女学校を1888年設立しました。花島は多くの人にキリスト教を勧めたでしょう。まだ幼い隆も自然に米国の文化に関心を持つようになり、キリスト教となったのも伯父の影響が大きいのといえます。

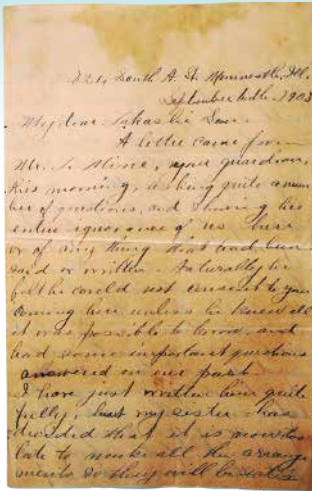
ただ小松自身による渡米前の少年期の回想記は少なく、ご遺族も幼い頃や三島につながる詳しい話を聞いたことはなかったといえます。

渡米

田中家も小松には安住の家ではありませんでした。小学校を終えるとわずか2年で田中家を出て、自らの力で稼ぎ生きていくことを決心し、東京、神田にあったキリスト教メソジスト系出版社で小間使いとして働きました。英語を夜学で学びながら「いつか米国に行って勉強したい、米国人の社会や生活を学びたいという気持ちでいっぱいだった」(自伝)と、渡米の夢を強く抱くようになります。小松はやがて宣教師の助手として渡米する機会を得ます。

1899年2月11日、13歳になる直前、米国への三等船室の乗客となりました。当時、日本からの移民が急増して、現地では筆舌に尽くせないほどの重労働と劣悪な生活環境、さらに黄禍論も高まって異人種・異文化への偏見のなか、日本人移民は生き抜かねばならなかった時代でした。渡米後、小松も米国の町を移動しながらしばらく苦労の日々が続きます。

やがて小松は、金沢などで長年宣教したことのある長老会女性宣教師ケイト・ショールと働き先の商店店頭で偶然知己になりました。小松がお守りのように生涯大切にしてきた彼女の1903年の書簡が今も数通残っています。これらを読むと、日本人仲介者の難癖に対し、小松を苦難の生活から救い出そうと彼女が奔走した状況が漏れ伝わります。



シヨーの手紙

シヨーは姉夫婦マッカーラー家に利発な小松を預けることにしました。子に恵まれなかったマッカーラー夫婦は小松の「米国の両親」となり、小松は二人の暖かい愛情を受けながらイリノイ州で高校、そして大学を卒業しました。学生時代には奨学金を得

てアルバイトをしながら、非常に多くの米国人友人に恵まれます。イリノイ州マンモス大学では、友人たちから「タカシはいったいつ休むのか」と言われるほど勉学に励み、弁論部で活躍、討論会で優勝したこともあります。1910年マンモス大を優等で卒業し、さらにハーバード大学院で国際法を学び、1912年5名の卒業演説者の一人に日本人として初めて選ばれ、「平和のあけぼの」のタイトルで演説をしました。またハーバード大留学中の浅野良三と大学図書館で出会い生涯の友となります。以後、日米両国の学生時代の友人が小松の生涯にわたって様々な縁を結んでいくことになります。

1913年小松は東洋汽船に入社、1922年から26年サンフランシスコ支店長として活躍します。1928年帰国後、小松は日本鋼管など企業人として働きながら様々な国際交流に参加し、1929年2月19日小松は東京RCに正式に入会しました。同日小林雅一も名古屋RCから転入会しました。

戦前のRI会議出席

ここからは小松による演説原稿「ロータリーの思い出」(日付不明、原文英文タイプ カーボンコピー)を中心に紹介しましょう。

「私が初めてRI会議に出席したのは1933年ボストン会議でした。この時日本からの参加者の一人に大阪からやってきたプレーザー(貿易商)がいました。

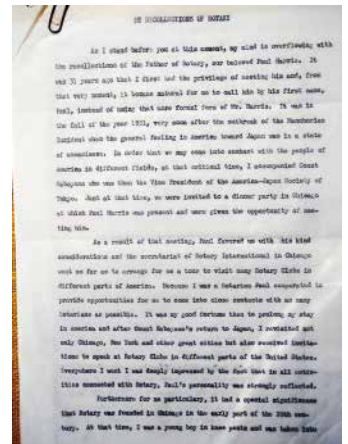
私も彼も数年前から東京倶楽部会員(二人とも日米協会会員)でしたから、すでにお互いをよく知っていました。ある夜、国際晩餐会に招待されたので、私は着物を着て出席しました。宴会後にはボストン交響楽団の演奏があるので二人で聴きに行きました。演奏会の第一部と第二部の間に30分の休憩があり、その間、ポール・ハリスとチェス・ペリーが全米のクラブに向けてラジオ放送をしていました。彼らの話が終わったところで、ちょうど2分半の放送時間が残っていました。その空き時間を埋めるために、適当な話題を彼らが探していたところ、私の着物姿が彼らの目を引きつけたのです。私は突然マイクの前に引きずり出されました。私の話が終わると私は皆にとっても喜ばれました。それは私の話が素晴らしかったからではなくて、私の話が30秒オーバーしたのに放送が中断されなかったからでした。

このお粗末なラジオ放送のおかげで、私はニューヨーク、シカゴ、ワシントン、デトロイト、セントルイス、インディアナポリスなど、多くの土地のクラブで話をするように、と

招待されるようになりました。」(「ロータリーの思い出」)

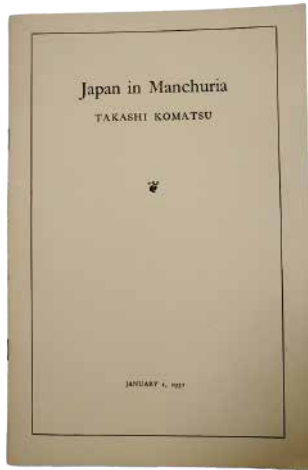
ところで国際交流史において評価が難しいのは、少し時を戻しますが、満州事変直後、満州における日本軍の行動を中国大陸における自衛行動であると東京RCや小松も広報活動をおこなったことです。東京RCでは1931年12月“The Manchurian Problem - Advancement of Understanding Goodwill and International Peace”のパンフレット約60頁を作成しました。

小松は、日米協会副会長樺山愛輔とともに1931年末から「満州事変に関し米国民の了解を得る為官辺の依頼に依り個人の資格に於て表面日米協会より



「ロータリーの思い出」冒頭部分

として渡米」(日米協会資料)しました。二人は米国政府要人などと会見し、全米の様々なクラブで演説会を開きます。小松は翌年1月“Japan in Manchuria”というパンフレットをニューヨークで印刷し、日本の軍事行動とその立場を説明し配布しました。彼らの語学力が買われた旅ですが、全米各地で日本の行動は不評でした。小松はこの訪米演説旅行の最後に「米国の両親」を訪れ、この渡米は本意ではないとこぼしました。どちらも相互理解や親善を目的とする団体が日本政府の広報者となった例です。



小松が作成したパンフレット

やがて、日中戦争のさなかの1940年RI会議代表として小松はキューバ・ハバナに派遣されました。この時のことを小松は次のように語ります。

「たびたび米国を訪れる機会を得られたのは幸運でした。しかしロータリアンの私にとって最も忘れられない経験は、1940年ハバナでのRI会議と帰国後の日本での出来事です。当時ヨーロッパではすでに第二次世界大戦が始まっていて、戦闘がますます激しくなっていました。私がおぼろげと覚えているのは、海外からは英国のロータリアン2名と私が会議に出席していたことです。RI代表アレン・アルバート前議長による国際フォーラムに参加できたことは私の大きな名誉でした。私は自分の見解として、日本のロータリアンたちはロータリーの理想を支持し、たとえ非常に厳しい情勢に直面しても、ロータリーの活動を発展させるために海外のロータリアンとともに協力していく決意であることを強調しました。

ところが、その後の展開は残念でした。当時はもちろん米国へ飛行機で渡ることはできません。2週間以上船に乗って太平洋を渡り、横浜に1940年7月15日の夜に到着しました。7月17日の東京RCの例会で、

私はこの渡航報告をしました。次いで直ちに当時の谷正之の外務次官公邸で、政府の様々な省庁の次官や局長たちを前に、非公式に私の米国での経験や現地の印象を詳しく報告しました。

当時は激動の時期で、この会合がもし開戦の2年前であったのならよかったのに、と思います。私が政府から招致を受けたのが7月16日だったのですが、翌17日、この会合のほんの数時間前、米内光政内閣は辞表を提出しなければならなくなり、近衛文麿内閣がまもなく成立しました。谷が新しい近衛内閣に入ることはありませんでした。」「(ロータリーの思い出)」

この時、小松は日本政府関係者へ枢軸側に入ることを反対したため、その後一切公の場で発言することを当局から禁じられました。後継の近衛文麿内閣、外相松岡洋右のもと、日米関係はますます混迷を深めていくことは言うまでもありません。小松の東京RCでの報告から間もなく、1940年9月11日東京RCは解散せざるをえず、12月4日東京水曜倶楽部が設立されました。

一方、驚くことに日米協会では1941年11月28日に総会を開いたことが議事録やサイン名簿から確認できます。小松もその出席者の一人で、52名余の日米両国出席者は、忍び寄る日米開戦の足音を感じながら、日米関係の友好を願い続けたのです。

真珠湾攻撃からまもなく、小松はRC入会の契機を作ったというYMCA幹部ラッセル・ダーギンの様子を見に行き、さらに在日米国人帰還の際にはダーギン一家を自分の車で集合場所まで送り届けました。国内での外国人に対する当局の厳しい監視のなか、小松は自らの危険も顧みない行動をとったのです。戦争の間、小松はひっそりと生活しました。

終戦直後の小松とその人脈

戦後の東京RCがRIへ復帰する前に小松がGHQとの間で奔走したことは知られています。小松が1946年1月に「GHQのバラード大佐を通じて日本がロータリー復帰を熱望している旨を国際ロータリーに申し送った」という記載があります。『東京ロータリークラブ50年のあゆみ』31頁)このバラードと兵器処理委員会などを小松とともに担当するのですが、上

記の記事の前からマンモス大学の旧友の縁が小松の活躍を後押ししていました。

終戦直後から小松は自らGHQへ出入りを始めます。GHQ到着まもないマッカーサーの呼び出しで外務省の役人たちとともにGHQに小松が出向くと、バラードがドノバン・バンス陸軍大佐（マンモス大学の旧友レイ・バンスの従兄）と話していました。バンスは「この人が日本へ着いた時から僕が探していた男ですよ」と言うと、バラードは、自分は小松と半月以上毎日会っているとバンスに話しました。（『最良の遺産』）小松は実業界の人々を代表して、重工業や燃料などのGHQ経済再建担当バラード陸軍大佐と、焼け跡の住宅再建のための材料、備品、人力などの調達にすでに毎日一緒に働いていました。

9月26日GHQから日本政府に兵器処理の命令が下ります。戦前から日本鋼管役員で財界にも人脈があった小松は、9月末から商工業経済再建に委員会委員として、次いで日本政府の窓口となる終戦連絡中央事務局（終連）に入り、11月からGHQ兵器処理委員会委員長（1945-48年）としてバラードとともに難題にあたります。鉄や鋼材に関する知識だけでなく、日米の両国政府から厚い信頼がなければ実行できない難題を、小松は誠実に兵器処理業務を遂行しました。

ちなみに、バンクロフト基金も戦後再建策の一環として教育を重視し、最も早く活動を再開した団体のひとつで、それが日米協会再開の契機のひとつにつながります。

RI 復帰へ

東京水曜倶楽部会長であった小松が、1946年からロータリー復帰協議会初代会長としてRI復帰に尽力したことはロータリー史で知られています。1947年3月18日の復帰協議会で20近くの各地RCが結成され、7月16日に初総会、翌年7月にも総会が開催されました。

「1948年8月のある日、マッカーサーの副官バンカー大佐から電話をもらいました。彼は私にまもなくシカゴから重要な来客がやってくると知らせてくれました。9月1日午前11時頃のこと、水曜倶楽部からシカゴ

のジョージ・ミーンズ氏が私に会いたがっているとの電話伝言があったのです。私はすぐに7階の自分のオフィスに駆け上がり、そこで私は、インドの任地からシカゴに帰国する途中のジョージ・ミーンズ氏に初めて会いました。その日はちょうど水曜日。彼はその日にあわせて日程を調節していたのです。私は直ちに彼を帝国ホテルで開かれる水曜倶楽部の会合に連れて行きました。彼は当然ながら、最高に熱狂的に迎えられました。

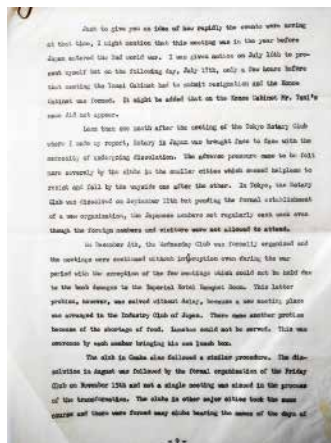
その日の夜、私は彼と神戸行の夜行列車に乗りました。翌朝神戸に着くと、私たちはロータリアンで水曜倶楽部の鈴木岩蔵と会いました。彼はすぐにクラブの幹部との会合を調整してくれ、私たちは例会にも参加しました。

翌日、我々は大阪に赴き、金曜倶楽部の里見純吉会長と役員たちと会いました。私たちが参加した週例会はロータリー精神に満ちたなかでおこなわれていたので、ジョージは日本での様子にとっても驚きました。

その翌日は土曜日、京都では例会はなかったのですが、京都クラブの幹部や会員たちが多く昼食会に集まり、午後は観光に興じてロータリアンで友情を深めました。こうしてジョージは日本各地のRCでロータリー精神とその実情をよく知ることになり、日本がRIに復帰したいと真剣に願っていることにたいく感激してシカゴに戻りました。

ジョージは1949年3月9日、再来日し吉報をもたらしました。オーストラリア・メルボルンRC会員だったア

ンガス・ミッチェルが当時、RI会長でした。当時オーストラリア国内では（注：太平洋戦争で日本と戦ったことから）対日感情は好ましくない雰囲気でしたが、アンガスは高貴なロータリーの精神を備えた日



「ロータリーの思い出」
水曜倶楽部の部分

本のロータリー復帰希望に同情し、その熱意を理解して将来に託そうと、日本のRI復帰を自ら推し進めたのです。」(「ロータリーの思い出」)(注：引用文および後段落の日付は小松のタイプ原稿による)

3月29日水曜倶楽部は解散、4月27日ジョージ・ミーンズがロータリー憲章を小林雅一会長に手渡しました。この式典には、吉田茂首相が出席して祝辞を述べ、小林がマッカーサーからの祝辞を読み上げました。以下、国内各地RCが復活するようすはよく知られています。

この間、元会員ダーギンが1948年12月GHQ着任を機に再入会し、翌年GHQ顧問として彼が日本のロータリー再建に活躍します。ダーギンは前述のように、開戦後米国への交換船集合場所へ小松が自ら車で送り届けた人物です。ただし1949年当時、小松は兵器処理委員会の関係で裁判中であったため「誤解を避ける為ロータリー復帰に関する事がらからはご遠慮」(「口述筆記」)し、手島知健と小林に託したといえます。裁判は1950年12月東京高裁で小松の無罪確定、冤罪は晴れて名誉を取り戻し、1955-56年小松は第60地区ガバナーを務めます。

市民レベルの国際交流へ

米山は戦後まもなく1946年4月28日三島で亡くなりました。米山の亡きあと、東京RCがRIにすぐに復帰したのも、小松の人のつながりと奉仕精神が種を撒いていたからといえるでしょう。やがて日本の占領は終わると国内RCの活動も活発になり、RCの栗原勝一の娘を長男の嫁に迎え、小松は息子夫妻とともに生活します。

ところで、戦前から続く国際交流はRCだけではありません。樺山愛輔前会長の後を受けて、小松は1950年日米協会会長となります。戦前から国際文化振興会でも活躍した樺山は今も国際文化会館に「樺山ルーム」にその名を遺しています。しかし高度経済成長が始まる直前の1950年代後半、日本の国際交流はそれまでの政財界や知識人らエリート中心の国際交流から、老若男女多くの一般市民との直接的な交流活動へ、市民対市民のレベルでの友好親善・相互理解へ、すなわちいわゆる「草の根の国際交流」

へと、大きく流れを変えようとしていました。

その一つが姉妹都市提携です。まず1955年に長崎市と米国セントポール、次いで1957年締結順に仙台、岡山、三島、大阪、神戸、横浜が、それぞれ相次いで日米姉妹都市提携を結びました。三島は国内4番目の提携となる7月24日、米国カリフォルニア州パサディナと都市提携を結びました。とくに三島は県庁所在地ではない都市の締結の嚆矢です。そしてこれら最初期の成功が、20世紀末に盛んとなった民間の「草の根」国際交流活動への推進力となりました。

もちろん日米協会も様々な日米交流活動を支援し、姉妹都市提携も理解していました。1957年7月三島での式典に「日米協会会長」として小松も出席しました。三島とパサディナが国際姉妹都市となったことは、小松にとって喜びでもありましたが、幼少からの種々の感慨も呼び覚まされたことでしょう。少なくとも彼は単に故郷に錦を飾ったのではないと筆者は思います。

ここで私たちが忘れてはならないのは、生涯に渡って小松の口癖であったという「相互理解と協力」と、RCの「超我の奉仕」とによる国際交流活動が、三島で日米姉妹都市提携として実を結んだということ、そしてその成長と発展が後世の人々に託されたということでしょう。



三島市・パサディナ市 姉妹都市縁組宣言式

本稿作成にあたり、ご遺族小松祥様、小松義明様、水沢RC佐藤剛様、三島市郷土資料館笹山曜子様、米山梅吉記念館市川真理様にご厚意ご教示を賜りましたことを心より御礼申し上げます。

間島弟彦と黎明期の鎌倉国宝館



鎌倉国宝館学芸員
金子 智哉

鎌倉国宝館では、令和3年(2021)10月9日(土)～12月5日(日)まで「生誕150年記念 間島弟彦と黎明期の鎌倉国宝館 -その知られざる物語-」と題した特別展覧会を開催しました。

展覧会を企画するきっかけとなったのは、令和元年に鎌倉市と青山学院大学が締結した連携協力に関する協定で、青山学院出身の間島弟彦が令和3年に生誕150年を迎えることを記念して展覧会を開催することになりました。

間島弟彦と愛子夫人は、当会報の2020 秋号 Vol.36



間島弟彦肖像写真
(鎌倉国宝館所蔵)



開館当初の鎌倉国宝館本館

において、「図書館とともだち・鎌倉」会員の鈴木保美氏が紹介されているとおり、鎌倉市にとって、当館や図書館の設立に多大な貢献のあった大変重要な人物です。本展では、国宝館の開館前後の活動の実態に光を当て、その中でも特に間島夫妻の功績に注目しました。

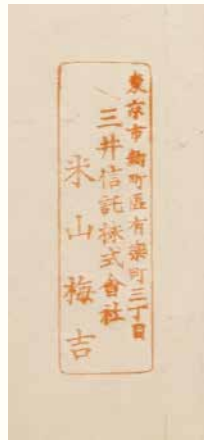
鎌倉国宝館は、大正12年(1923)に発生した大正関東地震による被害を契機に、鎌倉の文化財保護を目的として、社会貢献団体である鎌倉同人会が鎌倉町に働きかけて設立された博物館で、弟彦はこの鎌倉同人会の会員でした。弟彦は、昭和2年(1927)2月1日付文書「鎌倉国宝館建設に就き大方有志の義醸を請ふ」における発起人56名の中に名を連ね、さらに個人としても建設費への寄付を行っていましたが、残念ながら、開館直前の昭和3年3月に57歳で亡くなります。

鎌倉国宝館は翌4月になんとか開館にこぎつけたものの、建設費が当初の予定より多くかかったため資金不足にあえいでいました。それを知った愛子夫人は、夫の遺志を受け継いで国宝館のために鎌倉同人会を通じて1万5千円を、さらに直接5万円という大金を寄付してくださり、おかげでその運営は一気に安定することとなりました。

本展は、国宝館の寄託品と館藏品に加え、青山学院大学内にある青山学院資料センターから出品いただいた肖像画など貴重な作品や史料で構成しました。館蔵史料については、当館で会館直前の昭和3年(1928)1月1日から今日まで職員により書き続けられている業務日誌である『鎌倉国宝館庶務日誌』の中から、間島夫妻に関する記述のある個所を展示しました。また、収蔵庫や倉庫に保管されている史料群を調査したところ、思いもよぬ史料がいくつか見出されましたが、その中の1つが、寄付金5万円の指定金銭信



指定金銭信託契約書の文案



添付の封筒裏にある
米山梅吉の名前

託契約書の文案です。

先述の1万5千円の寄付により、国宝館の資金不足はほぼ解消されたため、残る5万円については愛子夫人を委託者、間島弟彦の親友であった米山梅吉が取締役社長を務める三井信託株式会社を受託者、そして鎌倉町を受益者として信託契約を締結し、積み立てられることとなりました。

この契約書案には、「委託者ハ、故間島弟彦カ其永住ノ地タリシ鎌倉町ノ公益ノ資ニ供スヘキ遺言ノ趣旨ニ基キ、該遺言執行者ノ同意ヲ得テ受託者ト左記條項ニ依リ、昭和三年八月一日(日付は鉛筆による手書き)指定金銭信託契約ヲ締結ス」とあり、遺言執行者として、米山梅吉と稲田三之助(通信省の官僚で、弟彦の義弟)の名前が鉛筆で記入されています。

条項は、第1条から第15条までであり、第2条に「信託期間ハ昭和三年八月一日(日付はペン書き)ヨリ向フ五拾箇年トス」とあるとおり、契約期間は50年でした。そして、第7条第1項で「受託者ハ、毎年五月及十一月末の決算期ニ於テ本信託ニ関スル収支ノ計算ヲ為シ、其純収益金ハ、之ヲ六月及拾式中ニ受益者ニ支払フモノトス」、第8条で「本信託終了シタルトキハ、受託者ハ本契約書ト引換ニ信託資産ヲ金銭ニテ受益者ニ支払フモノトス」とし、第9条では、この第7条第1項と第8条の支払い金は、全て国宝館の維持費に充当することを受益者に通告する旨が規定されています。

さらに、この文案には封筒が添付されており、表には、昭和3年8月2日付けで東京中央郵便局の消印が押され、宛名は国宝館初代館長の荒川巴次宛となっています。そして裏には、差出人として「三井

信託株式会社 米山梅吉」の名が記されています。

本契約書案は、米山梅吉と間島弟彦との交友関係の深さを窺い知れる貴重な史料です。また、国宝館の歴史を考えるうえでも貴重であり、今後は原本の所在をはじめ、その運用の経過や、契約が満了する昭和53年(1978)当時の状況などについての調査が必要であると考えています。

鎌倉国宝館は、中世鎌倉の禅宗美術を中心とした展示を行っており、本展のように一人の人物に注目した近現代史の展覧会は珍しいものでした。幸い、来館者アンケートでは「館ゆかりの人に切り口を設定した企画に感心させられた」、「個人でここまでの文化を保存できるとは圧巻」、「関東大震災被害の修復にいかん尽力されたか知ることが出来た」といった感想をいただきました。また、毎週水曜の午後実施した展示解説では、青山学院大学の卒業生の方からお声掛けいただくことも多く、国宝館と同じように間島夫妻の寄付により昭和4年(1929)に建設された渋谷キャンパスの間島記念館を懐かしく思い出されていたようです。

本展については、図録(全18ページ、1部100円)を刊行し現在も販売中ですので、是非そちらもご覧いただければ幸いです。



展示風景

「間島弟彦生誕150年 間島夫妻の事跡を辿る」 イベント開催される

間島弟彦・間島愛子夫妻 旌徳の会 会員
鈴木 保美

2021年11月27日、「間島弟彦・間島愛子夫妻 旌徳の会」が「間島弟彦生誕150年 間島夫妻の事跡を辿る」と題して三部構成のイベントを企画し『第16回湘南邸園文化祭2021』に参加しました。「間島弟彦・間島愛子夫妻 旌徳の会」は「図書館とともだち・鎌倉」の一部会として活動しています。間島弟彦氏生誕150年という節目の年を迎え、間島夫妻の功績の数々を紹介する良い機会となりました。第一部はメンバーの和田安弘さんが担当して「間島弟彦・間島愛子と鎌倉」と題しパワーポイントを使い間島夫妻の生涯を紹介しました。第二部は、旧鎌倉図書館、御成小学校敷地内にある間島君旌徳碑、壽福寺、英勝寺など間島夫妻ゆかりの地を巡るツアーを実施しました。そして第三部では、特別展「間島弟彦と黎明期の鎌倉国宝館～その知られざる物語～」が開催されていた鎌倉国宝館を訪問しました。

コロナ禍で一時は開催も危ぶまれましたが、「旌徳の会」としてもこれまでの研究成果を加えた資料を作成し、紅葉シーズンの鎌倉を楽しんでいただけるようなコース作り

を工夫しました。三時間半という長時間のイベントになりましたが、おかげさまで16人の参加を得て無事に終了しました。

参加者の中に青山学院初等部卒業生（昭和39年）がお二人おられ、米山梅吉先生のお名前がみられる展示資料などを興味深くご覧になり次のような感想をお寄せ下さいました。

「学芸員の方の説明で、5万円の寄附金は米山梅吉の信託銀行で運用する契約をしたというのが、考えれば不思議ではないのだけど、（当時でも）そういう方法があったのかと驚きました」「講座で丁寧な説明を聞いていたので、国宝館の展示もよく理解できました。学芸員の方が見つけた弟彦氏の写真が素敵でした。一番、興味を持ったのは愛子夫人です。今の時代に生きていたら、その生き方は大いに私たちに影響を与えてくださったことでしょう」「青学や三井だけでなく鎌倉でも間島氏と米山氏が結ばれていたことを初めて知り、お二人が多くの功績を残されたことに感銘しました。」「米山先生は初等部の米山講堂の胸像でしか存じあげなかったけれど、国宝館の運営に貢献された重要な方として記されたお名前を拝見し、あらためて先生を誇りに思いました。」

鎌倉国宝館での特別展開催とも相俟って、2019年の青学イベントへの協力に次ぐ今回の企画は、好評のうちに終わりました。これからも、間島夫妻を顕彰するための活動に力を入れていきたいと思えます。



お知らせ

米山梅吉記念館 春季例祭

皆様のご来館をお待ち申し上げます。

〔日時〕 令和4年4月23日(土)午後2時 ●開会前募参

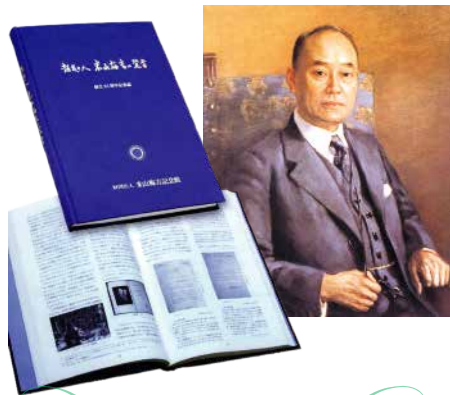
〔場所〕 米山梅吉記念館ホール

講演(2時30分～) [講師] ^とおやま ^あつこ 遠山 敦子氏
静岡県富士山世界遺産センター 館長
元文部科学大臣

〔演題〕『富士山と日本人』



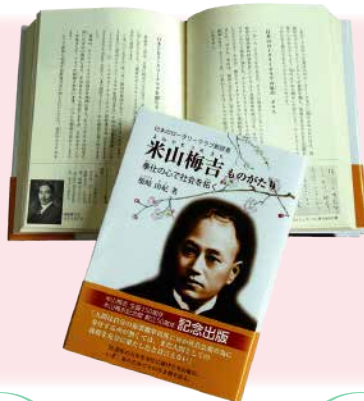
今後、コロナウイルス感染拡大の状況によっては、入場を制限させていただく場合がございます。



『超我の人 米山梅吉の聲音』

創立 35 周年の記念出版。ロータリアン、教育者、社会奉仕者としての米山梅吉研究を集大成した最良の一冊。「米山梅吉の生涯と業績」「ロータリーとのかかわり」「記念館の歴史」など、詳細な解説がなされている。資料編には、講演、月報やラジオ放送なども掲載。館所蔵の図書目録、年表なども網羅されている。

(財)米山梅吉記念館編集・発行
B5判 260頁 2,500円(税込)



『米山梅吉ものがたり』

生誕150年・(財)米山梅吉記念館創立50周年記念事業出版
明治、大正、昭和にわたる激動の日本に「奉仕の理想」を実現した人。我が国ロータリークラブの祖、社会への奉仕を生涯の信条とした、その根源が読み明かされる。

小・中学生から読める【伝記】ジュニアノンフィクションシリーズ
著者／柴崎由紀 令和元年7月 銀の鈴社発行
A5判 280頁 1,980円(税込)

購入ご希望の方は、書名、数量、お名前、連絡先をお知らせください。
商品が到着しましたら同封の振込用紙にて代金をお支払いください。
商品代金の他に、別途送料をご負担ください。

お申し込みは 公益財団法人 米山梅吉記念館
TEL:055-986-2946 FAX:055-989-5101

米山梅吉記念館のご案内

新幹線三島駅よりタクシー5分
東名沼津ICより15分

〔開館時間〕午前10時～午後4時

〔休館日〕●月曜日
●12月28日～1月4日
●整理のための休館日(5月・8月の特定日)

米山梅吉記念館 館報
Vol.39 春号

発行日／令和4年3月25日
発行者／公益財団法人 米山梅吉記念館 理事長 松村 友吉
〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1 TEL (055) 986-2946 FAX (055) 989-5101
URL <http://yonemasa-umekichi.jp/> E-mail yumh@ai.tnc.ne.jp